

**本講全体の課題と方法**

環境問題をめぐる多様な言説・主張を「根底的 (radical)」に問い直し、よりよい人間環境形成の道筋を探る。

基本的問題意識：人類＝自ら創出した「生産力＝破壊力」により、自らの「生命－生活」の存続を危機に。

- 1) 20 世紀中葉：核兵器の開発・使用で可視化。(物理学)。「非人間的＝人間的」行為。
- 2) 20 世紀後半～：自然環境破壊→日常化。(化学的汚染)。ex) マイクロ・プラスチック。
- 3) 20 世紀末～21 世紀：自らの生物的進化に直接介入。(分子生物学)。ex) ポスト・ヒューマン。

AI・シンギュラリティ。(数学)：ex) 「幸福な監視国家」。

※ 「危機(と受け止める)」か否かも含めて問われる。

現代の人類危機の克服・止揚を目指す人間のあり方を「根底的 (radical)」に考察。

方法：論点明確化のため、環境問題をめぐって流布している「常識」を批判的に考察。

**第1講 主体・環境・人間****《批判すべき「常識」＝反(脱)「人間中心主義」》**

環境破壊の原因＝人間の、あまりに“人間中心主義”的な発想・行為。

∴ “人間中心主義”を見直し、反(脱)「人間中心主義」(“生命圏平等主義”等)への発想転換が大切。

**《本講の考察》**

NO! 人間が想定する環境＝人間が認識する、人間にとっての環境。「主体」＝人間。

環境破壊＝人間の「生命-生活(life)」にとって不適切な環境の形成。

環境破壊の原因＝「人間中心主義」の喪失。(≠過剰な「人間中心主義」)

∴ 反(脱)「人間中心主義」：誤謬。

∴ 「地球／自然に優しい」行為＝「人間に優しい地球・自然」環境を維持・形成する人間自身の主体的・意識的な行為。

「持続可能性 (sustainability)」の追求＝人間の「生命-生活」を持続可能にするための環境を維持・形成する、人間自身の主体的・意識的な行為。

\* 人類が滅亡しても、地球・自然は十分に「持続可能」。

ただそうした地球・自然が人類にとっての「環境」でなくなるだけ。

∴ 環境問題の解決・「環境共生」：見失われた「人間中心主義」の復権。

人間の人間による人間のための意識的な環境形成。(共生：生態系に限定。双利・片利を含む)

なぜ、いかに人間は「人間中心主義」を見失い、自らの「生命-生活」に不適切な環境を自ら創出してしまうのか？。

なぜ人間は(人間だけが)、「非人間的」になれるのか？ (＝本講全体を通して解明すべき課題)

**第2講 自然としての人間／人間としての自然****《批判すべき常識＝「限りある自然を大切に」説》**

地球・自然＝有限。∴ 人間の生産力・欲望に「成長の限界」を設け、循環型の経済・社会を構築すべき。

\* 前回の「反(脱)人間中心主義」とは異なる面も。人間の生存・利益のために「循環型社会」を。

こうした違い・矛盾もあまり考察されないまま、「並列的」に流布。

**《本講の考察》**

NO! 人間が認識する「自然の限界」＝人間の知・生産力の限界。(≠自然それ自体の限界)

自然は無限、人間・人知は有限。(人間＝自然を滅ぼせず、征服もできない)

∴ 自然を完璧に制御する「循環型」経済・社会＝永遠に実現不可能。

「循環型の持続可能な技術・社会の実現が可能」＝事実の誤認

(←無知 or 何らかの目的に基づく意図的隠蔽)

人間が自然を維持・再生産しなければならない理由

＝人間が自然の一部としてしか生きられない(生態系の一部。共生)から。(≠自然が有限)

& 自然・生態系＝人間の生存にとって、つねに好都合とは限らない。(闘争)

∴ 自然それ自体に目的なし。目的＝生命とともに発生(生存)。

∴ 人間：自らの「生命-生活(生存)」の必要に基づき、それに適した自然を主体的・意識的に維持・改造する必要。(＝生産力の継続的・累重的発展)。現に人間はそうにして生存・進化。

### 第3講 「人新世」論は正しいか？

#### 《批判すべき「常識」＝「人新世」論》

近代以降、人類の(経済)活動の痕跡が、地球の物質的組成・生態系全体を覆い尽くし、新たな地質的時代(完新世→「人新世」)に突入。(特に気候変動)  
近代社会の生産力至上主義・「自然の搾取」を見直し、自然と共生する新たな社会システムを。

- \* 「限りある自然を大切に」説の現代版。BUT 若干の相違面も。  
1) 「資源の『使い尽くし』→人類の破滅」だけでなく、「人類の行為→気候変動→人類の滅亡」。  
2) 人間の生存維持を主要目的(≠「反(脱)『人間中心主義』」)。

#### 《本講の考察》

NO! 人間：自然の変化・進化(過去の気候変動を含む)の一環として誕生。

気候変動の要因・メカニズム：多くは未解明。

人為的要因(特にCO2排出)との「一対一対応」的認識には、多大な危険も。

& 人間：脳が発達。自然の因果関係の認識、目的意識的な自然改造(＝労働)。

労働によって生存・進化・生産力発展。アフリカ→世界中で生活環境実現・生存。

BUT 「自然は無限、人知は有限」(第2講)。∴ 「予期せぬ／意図せざる結果」も。

ex) 効率的狩猟(旧石器時代)→多くの大型動物種絶滅。

農耕(森林伐採)・牧畜(動物との日常接触)→洪水・新型感染症。

「予期せぬ／意図せざる結果」を含め、「手付かずの自然」＝皆無。(すべての自然＝社会的産物)

ex) 赤蜻蛉、シダ、ヒマラヤのお花畑、「宇宙の果て」。

自然の大規模な人為的改変＝近代以前、旧石器時代(完新世)から一貫。

(近代以降に限定する「人新世」論：問題の矮小化)

& その行為こそが人類の生存・進化を可能に。(「人新世」論：人類の生存原理の否定。問題の一面化)

### 第4講 環境外在論と「主体－環境」系論

#### 《克服すべき「常識」＝【環境外在論】》

環境＝人間(主体)を取り巻く客観的な外界・外的諸条件。

∴ 環境問題を解決するには、環境の客観的な分析が大切。

#### 《本講の考察》

NO! 環境＝人間(主体)にとって意味ある事象の総和。

∴ 1) 主観的な意味世界でもある。(≠単なる客観的実在)。(≃地平線、多様な「海」)

2) 内界・内的諸条件でもある。(≠単なる外界・外的諸条件)。(≃メビウスの環)

3) ∴ 主体と環境＝切り離し不能。たえざる相互作用・連環→互いを改変。(“共進化(coevolution)”)。

主体と環境：切り離せない一つの意味連関の過程。「主体形成－環境形成」の動的な過程。

＝【主体－環境系論】。(主体－環境の二分法・二元論＝【環境外在論】の克服。今西錦司)

※追記 性差(第11講)＝1)～3)のいずれの意味でも「人間にとって意味ある事象＝環境」。

【環境外在論】＝近代的な環境－科学観。→【主体－環境系論】＝脱近代的な環境－科学観。

環境共生学(国際人間学部)：主体のあり方と切り離された「環境」の客観的分析・その寄せ集め(＝「学際研究」)にとどまらず、諸科学の知見を、「主体形成(人間発達)－環境形成」を集約点として統合する新たな理論的挑戦が必要。

### 第5講 近代の光と影

#### 《克服すべき「常識」＝反(脱)科学・新々宗教・スピリチュアリズム・カルト》

近代文明・近代科学＝物質主義、産業・経済優先。科学万能主義、人間中心主義、「人間による自然の征服」、哲学・価値観・道徳の喪失＝危機的な環境破壊の元凶。

∴ 自然・精神世界(スピリチュアリズム)、哲学・宗教的価値を重視＝オルタナティブ。

#### 《本講の考察》

NO! 上記の「常識」＝近代文明・近代科学への無知・無理解・「思い込み」。

1) 近代科学(進化論・地動説・万有引力の法則)＝「自然によって支配／自然の一部としての人間」の発見。  
(≠人間中心主義・自然の征服)

2) 近代思想(近代自然主義・自然法)：人間的自然(human nature)としての哲学・道徳・価値観。  
(≠人間中心主義・自然の征服)

3) 近代科学：人間存在の根本を指し示すコスモロジー・世界観・哲学の大転換。  
(≠現代、イメージされる細分化された複数形の諸科学)

※ スピリチュアリズム：こうした近代科学・近代文明に対する無知・誤解に立脚、自ら（精神世界）をオルタナティブとして対置。

BUT 近代科学・近代文明が人類の生存の危機をもたらしていることは事実。（本講：基本的問題意識）

近代文明・近代科学＝なぜ、どのようにして「環境破壊の元凶」へと変質したのか？（＝第6講の課題）

## 第6講 科学は環境を守るか？

### 《批判すべき「常識」＝科学万能主義》

科学＝永遠不変の真理。（政治的立場・主観に左右されない客観的認識）

∴ 環境問題の解決：科学的データ、専門性に基づく客観的分析を重視すべき。

& 科学：細分化するほど高度な専門性を獲得。より深い真理に迫ることができる。

### 《本講の考察》

NO! 科学＝できるだけ速やかに反証されるべき仮説。日々更新される不完全・暫定的な知。（≠永遠不変の真理）

\* 何があろうが絶対に変わらないのは、政治的・宗教的信念。（≠科学）

& ∴ 科学の最大の前提・基盤＝「無知の知」。（科学万能主義＝最も非科学的な「信仰」＝再魔術）

近代諸科学：細分化・専門分化による視野狭窄（アマルティア・セン「合理的な愚か者」）、

トータルな現実の正確な把握が不可能。「科学的」データの過信は危険。

本質的目的（人間の「生命-生活」）を喪失（科学のための科学）。

∴ 1) 脳の進化：本質的目的と手段的目的の多重化・錯綜。

「目的」の発生＝生命の発生。脳による「目的」の自覚→本質的目的と手段的目的の発生。

∴ 本質的目的＝「生命-生活」の再生産。

（第3講 自然それ自体に目的なし。目的は生命の誕生とともに）

2) 現実に重視される主要な手段的目的：階級社会における剰余価値とその搾取の最大化。

∴ 近代諸科学の「手段的目的」化：資本主義的生産様式（利潤増殖）。

（第5講）スピリチュアリズムによる一面的な近代科学・近代文明「批判」

＝「生命-生活」（矛盾に満ちた物質と精神の統一）を「矛盾なき精神世界」に一面化。

資本主義的生産様式の問題に踏み込まず（目を反らし）、「精神世界」に逃避。

※ 追記「科学万能主義」の典型的な言説

1) 科学的に立証されないこと＝迷信。宗教＝迷信。科学と宗教は相反する。「宗教は怖い・怪しい」。  
＝科学の最大の基盤・「無知の知」の軽視。

2) 科学をどう使うかは人間次第。たとえ悪用されても、科学自体に罪はない。  
＝科学それ自体が人間の社会的な産物であることを看過。

3) 「安心安全」の重要性。科学的・客観的な「安全」が確認されても、人々を「（主観的な納得としての）安心」させるため、丁寧な「説明（啓蒙）」が必要。  
＝客観と主観の二分法。（第4講）

## 第7講 環境保全と人間の発達

### 《克服すべき「常識」＝「社会的ジレンマ論」》

環境破壊の原因＝人間の本源の欲求＝豊かさの追求。∴ 人間は等しく、環境破壊の被害者・加害者。

∴ 一人一人が自らの生活様式を見直し、欲求を抑制すべき。

### 《本講の考察》

NO! 環境保全に不可欠な観点と実践

1) 方法的・技術的な知・能力。（科学技術）

2) 価値的な知・能力。（人間の「生命-生活（life）」の保持を最優先）。

3) 科学万能主義の克服。「無知の知」の堅持。

4) 「無用の用」の重視。

環境破壊（予期できる／意図的な環境破壊）の発生・拡大の原因＝4つの観点が貫徹されないこと。

\* 「無限の自然、有限の人知」に基づく「予期せぬ／意図せざる環境破壊」との相違。

4つの観点・実践が貫徹されない理由

＝生産力の累重的発展（剰余価値生産・生産力）とその搾取（生産関係）の構造的問題。

近代に即していえば、資本主義的生産様式（利潤増殖至上主義）。

「社会的ジレンマ論」の誤謬

1) 環境破壊の原因が人間の「本源の欲求（本能）」であるなら、環境保護のあらゆる言説は無意味。

社会的ジレンマ論：論理的矛盾。（解決できないからジレンマ）。

- 2) 人類：(豊かな生活を求める) 本源的欲求を原動力→剰余価値生産、数々の環境危機を認識、目的意識的に対処。 ∴ 現在まで生存。  
環境破壊≠本源的欲求・人間の利益・人間の豊かな「生活」。
- 3) 生産様式・社会構造の問題→「生活様式」、個々人の生活様式・意識の問題に矮小化。  
資本主義の構造的矛盾を隠蔽。「人間(個々人)の利益」と「資本の利潤」を混同。  
& 階級格差(利潤増殖のための環境破壊、被害の受容の階級格差)の事実も無視。

## 第8講 「人間の利益」と「資本の利潤」

《克服すべき「常識」=特になし》

《本講の考察》

環境破壊の原因は何か？ 4つの観点はなぜ貫徹されないのか？ 主にマルクスの剰余価値説で考察。

- 1) 「自然=無限、人間・人知=有限」。  
∴ 「予期せぬ/意図せざる環境破壊」=人類史に普遍的。「意識的な動物=人間」の宿命
- 2) BUT 人間=「予期できる/意図的(意識的)な環境破壊」も創出・放置・拡張。  
= 4つの観点を忘却。「非人間的」に生きられる意識的な唯一の動物。  
自然の意識的改造(労働)=単純再生産を越えた剰余価値を生産。  
=生産力の累重的発展。生存できる生活環境を拡張、生存を維持。  
BUT 意識的ゆえに本質的目的と手段的目的の重層化・錯綜。  
本質的目的を見失い、すべてを「手段」化することもできる。  
∴ & 剰余価値の搾取=階級の発生=剰余価値(生産と搾取)の最大化を至上目的化。  
「非人間的な社会」を創造、生産力=破壊力の発展として機能させることもできる。  
∴ 近代以前(奴隷制・封建制)から環境破壊。(古代文明崩壊等)  
現代における剰余価値搾取の主要形態=資本主義(剰余価値を利潤という形態で搾取)。  
∴ 現代の「予期できる/意識的な環境破壊」の原因=資本主義的生産様式(利潤増殖至上主義)  
& 資本主義=グローバルな世界システム(≠一国単位)。∴ グローバルな人類絶滅の危機。  
(≠古代文明の崩壊)

- ※追記 1)である以上、資本主義的生産様式を克服しても「矛盾のない理想的・調和的な社会」は到来せず。資本主義の克服=矛盾なき理想社会の実現ではなく、資本主義の矛盾によって人類が減びず、生き残るための主体的選択。  
∴ 「資本主義に代わる理想社会の客観的な設計図を提示せよ」は間違い。  
重要な課題:資本主義的生産様式の矛盾を直視、その矛盾の克服の道筋を模索・解明。  
客観主義的には、資本主義の矛盾で人類滅亡(=人類にとって最後の生産様式が資本主義)の可能性も。  
(第4講 主体と環境/主観と客観の二分法)  
BUT 人類:「生命-生活」の矛盾を克服、生産様式を変革。∴ 生存。

## 第9講 ポスト・フォーディズム、脱産業社会、情報社会の環境破壊

《克服すべき「常識」=「エコ資本主義は可能だ!」「環境先進国・北西欧を見習って!」》

環境破壊の原因:フォーディズム(大量生産)・産業社会。(≠資本主義)

- ∴ ポスト・フォーディズム(多品種少量生産)、脱産業社会化・情報社会化の進展、  
産業・経済・物質・製造業優先 → 文化・情報・生活・文化・サービス優先。  
& それを支える技術的進歩・市民意識の成熟(エコ商品、厳格な環境規制)によって、(資本主義の枠内でも)環境破壊を抑制・克服が可能。

《本講の考察》

NO! 資本主義=一個の世界システム(≠一国単位)。

帝国主義・植民地主義 → ポスト・コロニアルのグローバル資本主義。

植民地独立後、多国籍企業・海外現地生産=主要な資本蓄積様式。

「世界の工場」:「先進」国→「周辺」国。

ポスト・フォーディズムの脱産業社会・情報社会: ポスト・コロニアルの世界資本主義システム(超産業社会)の中核管理機構。

- ∴ 1) グローバルな大量生産・大量消費システムを前提。  
2) 知・情報・サービス・文化:莫大な物質・経済・産業の基盤上に成立。  
\* 「生活・文化・知」と「産業・経済・物質」の二分法は無意味。

3) 地球規模の環境破壊。その被害もグローバルな格差。

中核諸国内での厳格な環境規制

→1) 一層の海外現地生産化。公害「輸出」。グローバルな環境破壊。

2) 中核諸国内で「エコ商品」の新たな市場創出。

3) 環境基準をクリアできない弱小企業を駆逐。寡占・独占を推進。

= 利潤増殖・資本蓄積の戦略・手段。

「中核諸国」= 「周辺」の剰余価値搾取の上に成立する特殊な社会。

(≠ 「周辺(後進)諸国」の未来像、「先進」国)

※ 「ベーシックインカム」「社会主義国(国家資本主義・開発独裁)」「福祉国家」等、いずれも一国単位 & 分配の問題(≠生産様式・搾取の変革)。展望たり得ず。

※ 《克服すべき「常識」= 「エコ資本主義は可能だ!」「環境先進国・北西欧を見習って!」

= 単なる無知のみではない、意図的なイデオロギー(虚偽意識)とそれによる洗脳。

※ ポスト・コロニアリズム: 20世紀後半以降、現在進行中の理論的・実践的挑戦。

## 第10講 環境としての社会

### 《克服すべき「常識」》

環境=自然のこと。環境問題=つきつめていけば自然環境の破壊や保全の問題。

### 《本講の考察》

NO! 環境=人間にとって意味ある事象の総和。(第4講)

人間が認識する自然=つねに既に社会的・人間的な自然。(逆も同じ)(第2・第3講)

現代社会環境: 巨大な転換期。人類的危機。「地球的問題群(global problematique)」。

ex) 核戦争・核汚染、自然環境破壊、グローバルな格差・貧困、社会解体・人間疎外、排他的ナショナリズム・リージョナリズム

地球的問題群: 1) 個別問題どうし & 個別問題内部で、相互に複雑に連関。

∴ 個別問題に視野限定した解決: 不可能。必ず「意図せざる結果」が発生。

2) 共通の土台: 世界資本主義システム。(第7~第9講)

∴ 生産様式の問題に踏み込まない/国民国家に依拠した問題解決: 不可能。

= ポスト・コロニアリズムの環境保全にみる理論的・実践的な挑戦。(多様。最大公約数的整理)

ex) チャタジー、ギルロイ、ウォーラーステイン等。

a) 社会(政治・経済・市民社会)に関する洞察・知見。(≠自然・技術に視野を限定)。

b) 資本主義的生産様式(利潤増殖)の変更。(≠生活・消費様式・意識の変更に視野を限定)。

c) 国民国家(国民主権・国益追求)の排他性の克服、グローバルな社会圏の主体的構築。

(≠国民国家の正当性に視野を限定。被抑圧階級=社会変革の主体≠救済の対象・客体)

※ 実際の環境保護運動: 多様。一部はa)~c)の意図的隠蔽・近代主義イデオロギー(虚偽意識)も。

本講で批判してきた多様な「克服すべき『常識』」: 一部は単なる無知・誤解ではなく、資本の利潤増殖の手段、事実隠蔽の近代主義イデオロギーとして流布、洗脳の結果。

※ 社会(生産様式)の変革: グローカルな社会圏。

ex) 移民・難民の「生命-生活」を支える越境的コモン。

ワーカーズコープ、大半の企業での職場集団・中小零細企業、地域社会のコミュニティ。

一面的な「国民」に回収されないマルチチュード(多様な民衆)のコモン。

= 世界の変革: 一部エリートによる「理想社会の設計図」の提示・啓蒙・共有ではなく、

多様な民衆(資本主義・国民国家によって生活を守れない、主に下層階級)による、「生命-生活」の維持、そこでの矛盾克服の主体的営為、それらのために必要なグローバルな協働・連帯(コモン)。

社会変革を本質的目的とせず。生活の発展的再生産こそが本質的目的。

「社会を変革するために生きる」のではなく、「生きるために社会を変革せざるを得ない」。

社会変革=せいぜい手段的目的。∴ その意味でも「理想の(唯一の)設計図」は存在しない。

多様なマルチチュードによるグローバルな社会生活圏の重層・錯綜。その彼方に生まれる人類社会とは?

※ 「矛盾のない理想社会」を設計、それを目指して国民主権に基づき、民主的に合意形成・啓蒙・理念共有・教育していけば、そのような社会が必然的・予定調和的に到来・実現=非現実的。

ポスト・コロニアルの「国民主権/民族解放」の資本主義世界システムによる幻想・洗脳。

## 第11講 環境としての性差

### 《克服すべき「常識」》

「生得的属性＝性」による差別は不当。人は獲得的業績で評価すべき。(リベラル・フェミニズム)  
性差＝自然的本質であるだけでなく、社会的構築物。自然本質主義による差別は不当。

セックスとジェンダーの峻別、社会的変革・差別是正は可能・必要。(ジェンダー論)

### 《本講の考察》

NO! 1) リベラル・フェミニズム＝資本主義的階級構造(メリストクラシーの幻想)と親和的。

2) 人間にとってあらゆる自然＝つねに既に社会的。(第2・第3・第10講)

自然と社会の戦略的二分法(ジェンダー論)の限界。

資本主義的生産様式：「生得－獲得／自然－社会」のあらゆる指標を階級配置に活用・動員。

∴ 二分法によるオルタナティブ：すべて資本主義的差別の正当化の論理に回収。

\* 属性・業績／自然・社会の多様性があるから、差別が生じるのではない。

多様性は上下の格差・序列として配置されることで差別が発生。

格差・序列＝階級構造と無関係ではあり得ない。

\* 生産様式・資本主義的生産様式の変革に踏み込まない環境問題解決は不可能・欺瞞。(第7～第10講)

性差＝典型的な環境問題＝人間にとって意味ある事象。

克服に向けた理論的挑戦：

1) クィア理論。「女らしいのは自然、クィアらしいのは不自然」といった自然本質主義者の欺瞞性を暴露。

2) 現代版フェミニズム。バトラー等。

セックス＝つねに既にジェンダー。「自然と社会の二分法」を批判。

女性＝ポスト・コロニアルの連帯(コモン形成)の主体(≠単なる差別の被害者・救済の対象)。

※ 先に想定していたテーマ：「遺伝と環境」。

《克服すべき「常識」と主な論点》：

「遺伝＝自然、環境＝社会」。(≠「環境＝自然」。逆転の「自然と社会の二分法」の誤謬)

人間は「遺伝と環境の双方によって規定」。(＝人間の主体性の無視)

環境整備のみに視野を限定(遺伝には触れず)する近代諸科学。(教育学・心理学・生活科学等)

《本講の趣旨》：自然と社会の二分法批判、客観主義批判、主体の環境の二分法批判。

& 遺伝・生殖・世代・性差：個人主義の限界を克服する一契機。

ポスト・ヒューマンの問題にも連鎖。

追加質問の中に、「反出生主義」「AIによる個人主義と人類的利益」関連も。 あとは、自分で!